

地域 × 担い手の交点



地域版 知的資産経営報告書 in 南越前町 2024/03

福井県南越前町 複業家 中谷翔
(作成: 東京都中小企業診断士協会
知的資産経営研究会)



ごあいさつ



「9年間で住民が1,500人も減った町」

そう聞くと、あなたはどんな地域を想像するでしょうか。

人が減って活気がなくなり寂しくなった。商店や交通機関がなくなり不便になってしまった。そんな地域を想像するかもしれません。

しかし、実際にその場所に訪れてみると、そんな想像からかけ離れた光景を目にするかもしれません。人の数こそ少ないものの、住民同士の繋がりが強く、支え合っているようなコミュニティを体感するかもしれません。

今回、皆さんにお伝えする物語の舞台となる福井県南越前町は、まさに冒頭の人口が1,500人も減った町。そんな町に、8年前の2016年に地域おこし協力隊（総務省の地域活性化事業）として移住してきました。人口が減っていると聞きながらも、実際に住んでみると住民同士の繋がりが強く、単身で移住してきたにも関わらず「寂しくない」という不思議な経験をしました。むしろ、都会で暮らしていた時の方が人との繋がりがなく、寂しさがあったように思います。

そんな南越前町には昔からの産業が今でも残っていますが、親から子どもへ引き継がれてきた産業も時代の流れとともに引き継ぎが難しく、後継者不足となっています。しかし、そういった暮らしの一部となっている産業の中に、人を引き寄せる魅力があります。けれども、生まれた時から当たり前にそれを見てきた地元住民にとっては、その魅力に気づかず、ただの「大変な作業」にしかならないのです。

そこで私を含む移住者が中心となり立ち上げたのが、「地域まるっと体感宿 玉村屋」を核とする地域の暮らしを体験する事業です。この地を訪れた人々が観光ではなく、地域住民とともに汗を流し、お手伝いすることで、地域住民との人間同士の関わり合いが生まれます。これが地域住民にとっても、訪問者にとっても、自分の日々の暮らしに彩りを添えることができる体験になるのです。

私たちの取り組みは、有名観光地がなく「ここにはなにもない」と思われている地域でも、そこに人が暮らしている限り、人を呼ぶことができるモデルです。人口が減少していても、活気を維持する道筋が見えるかもしれません。この一冊が地域を活性化したいと考えているあなたの何かのヒントになれば幸いです。

地域と関わり複数の仕事で暮らす“複業家”
一般社団法人ぷらすたいむず 共同代表

中谷 翔

目次

1. はじめに	1
(1) 地域の課題	1
(2) 総務省の取り組み	3
(3) 本書の狙い	3
2. 南越前町の概要	4
(1) 地理・交通と気候風土	4
(2) 「山・海・里」の3つの地域の特徴と特産物	5
(3) 地域の担い手の現状	6
3. 地域活性化の取り組み(過去～現在)	7
(1) 行政による地域活性化へのアプローチ	7
(2) 民間による地域活性化へのアプローチ	9
(3) 取り組みのまとめ	11
4. 「地域」と「担い手の交点」の強み(知的資産)	12
5. 地域活性化の今後の展開(現在～未来)	13
(1) 南越前町(行政)の目指す方向性	13
(2) 「担い手の交点」である私たちが目指す方向性	13
(3) 強み(知的資産)の強化	15
(4) 今後の主な活動計画	16
6. 参考資料	18
7. あとがき	19

● 知的資産経営報告書について

知的資産とは、バランスシートに記載されている資産以外の無形の資産であり、企業等における競争力の源泉である人材、技術、技能、知的財産（特許・ブランドなど）、組織力、経営理念、顧客とのネットワークなど、財務諸表には表れてこない、目に見えにくい経営資源の総称です。

「知的資産経営報告書」は、この目に見えにくい経営資源、即ち非財務情報を、債権者、株主、顧客、従業員といったステークホルダー（利害関係者）に対し、「知的資産」を活用した企業価値向上に向けた活動（価値創造戦略）として目に見える形でわかりやすく伝え、企業等の将来性に関する認識の共有化を図ることを目的に作成する書類です。

本報告書は、経済産業省から2005年10月14日に公表された「知的資産経営の開示ガイドライン」に準拠しつつ、対象を企業から地域社会へ変えるために必要なアレンジを加えて作成しております。

1. はじめに

(1) 地域の課題

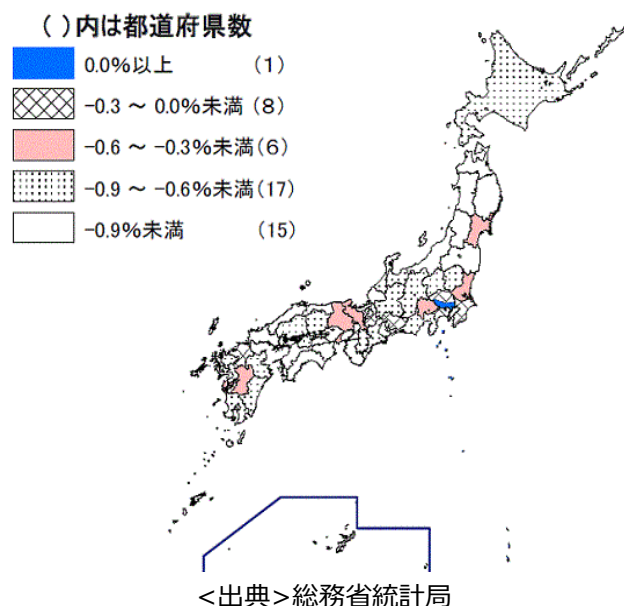
① 人口減少

総務省の 2022 年統計によると、日本の人口は、1 億 2494 万 7 千人で、前年に比べ 55 万 6 千人（0.44%）の減少となり、12 年連続で減少が続いています。

都道府県別に見ると、東京都以外の道府県では前年と比較して人口が減っています。減少率の高い県の TOP3 は、秋田県(1.59%)、青森県(1.39%)、岩手県(1.32%)でした。特に、人口減少率が前年と比較して拡大したのは 23 県あり、そのうち最も拡大したのが、対前年差 0.16 ポイントの福井県(1.00%)、和歌山県(1.13%)、岩手県(1.32%)です。

日本全体で人口は減っており、特に地方の人口は減少しています。(図表 1)

【図表 1】都道府県別人口増減率



② 地域コミュニティの現状

人口減少のみならず、単身世帯や女性・高齢者雇用の増加など、住民のライフスタイルの変化により、地域社会におけるつながりの希薄化が進み、その危機感は一層高まっています。

総務省の市区町村アンケートにおいて、2010 年度から 2020 年度までの自治会等の加入率を世帯単位で把握している 600 市区町村における自治会等の加入率の平均の推移は、2010 年に 78.0%であったのが、2020 年では 71.7%となっており、6.3 ポイント低下しています。(図表 2)

【図表 2】600 市区町村における自治会等の加入率の平均

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
加入率(%)	78.0	77.6	77.2	76.5	75.9	75.3	74.7	74.0	73.3	72.4	71.7

<出典>総務省総務省「自治会等に関する市区町村の取組についてのアンケート調査」

自治体の現在の課題では、「役員・運営の担い手不足」が 86.1%と、「役員の高齢化」を抑えて、一番の課題と認識されています。(図表 3)

住民の減少に留まらず、地域コミュニティの担い手が不足している状態となっています。

【図表 3】自治会の現在の課題 (2017 年 3 月)

自治会の課題	回答数	率
役員・運営の担い手不足	984	86.1%
役員の高齢化	946	82.8%
近所付き合いの希薄化	676	59.2%
加入率の低下	608	53.3%
行政からの依頼事項が多い	414	36.3%

<出典>内閣府男女共同参画局

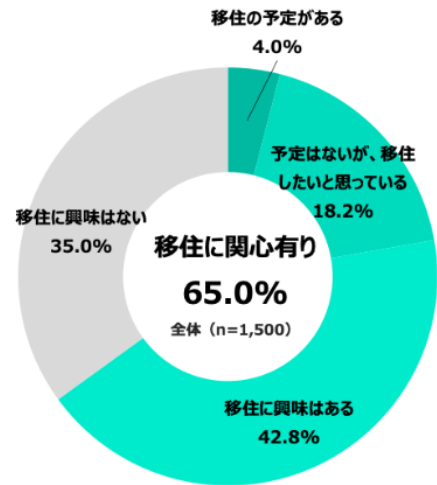
「持続可能な自治会活動に向けた男女共同参画の推進について」

③ 地域との多様なかかわり方

地方を中心に人口やコミュニティの担い手が減る一方で、株式会社モニタスが、東京都在住、20代～40代（学生除く）の1,500名を対象に実施した「移住に関する意識調査 東京在住者編」(2022年09月)によると、移住したいと思っているが18.2%、興味はある42.8%でした。全体として、地方移住に関心を持つ人は、約65%います。(図表4)

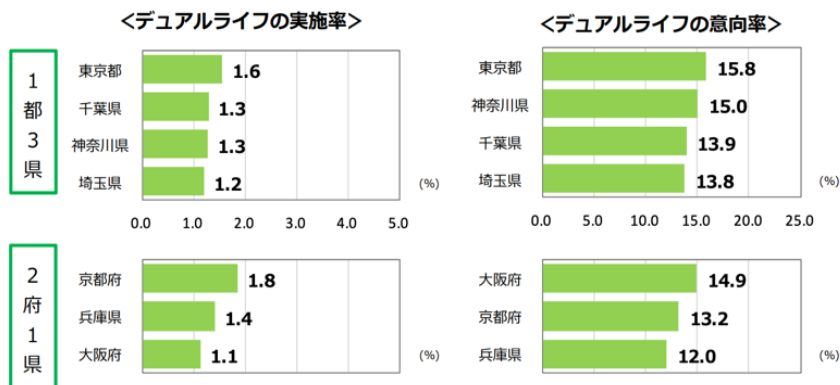
また、株式会社リクルート住まいカンパニー「デュアルライフ（2拠点生活）に関する意識・実態調査」(2019年2月)によると、全国で二拠点生活（デュアルライフ）の実施者は1.3%、意向がある人は14.0%でした。東京都では、実施・意向を合わせ17.4%です。都会に住む一定数の人は、二拠点生活として地方に関わっていきたいと考えていることがわかります。(図表5)

【図表4】移住に関する意識調査



<出典>株式会社モニタス

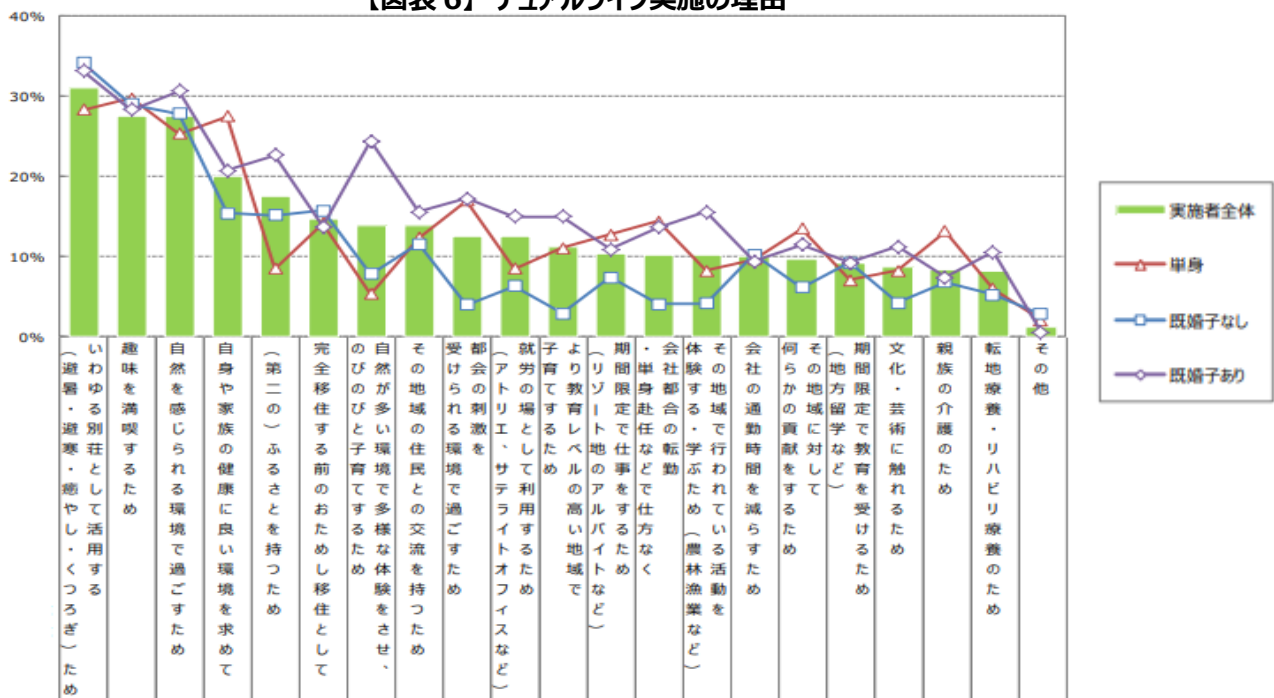
【図表5】「デュアルライフ（2拠点生活）に関する意識・実態」調査



<出典> 株式会社リクルート住まいカンパニー

また、二拠点生活実施理由としては、「完全移住する前のおためし移住として」は実施者のうち15%にとどまっていることから、別荘としての活用や趣味を満喫するためなど、移住を前提とせずに地方と関わりたいと考えている人が多いことがわかります。(図表6)

【図表6】デュアルライフ実施の理由



<出典> 株式会社リクルート住まいカンパニー

(2) 総務省の取り組み

① 関係人口創出

地方の担い手不足問題に対し、総務省では、関係人口を活用した地域の担い手確保を目的とする事業を行っています。

「関係人口」とは、移住した「定住人口」でも観光にきた「交流人口」でもない、特定の地域に継続的に多様な形で関わる者です。例えば、地方と都市部との二拠点生活をおくる人や、地方と関係性があり定期的に訪れる人が関係人口にあたります。

関係人口を増やす取り組みとして、総務省では「『関係人口』ポータルサイト」を通じて、各自治体の取り組み事例の発信や、関係人口になりたい人に向けた交流体験プログラム等のイベント参加者の募集を行い、各地域と関係人口になりたい人のマッチングを行なっています。

② 地域おこし協力隊

地域おこし協力隊とは、各自治体の委嘱を受け、都市地域から地方へ住民票を異動し、地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取り組みです。隊員 1 人あたり 480 万円を上限とした財政措置が総務省から行われます。

任期は最長 3 年間で、任期中は、サポートデスクや OB・OG ネットワーク等による日々の相談、隊員向けの各種研修等様々なサポートを受けることができます。具体的な活動や条件は自治体によって異なり、任期終了後の起業・事業継承に向けた支援がある自治体もあります。

2022 年度の地域おこし協力隊の隊員数は、前年度から 432 名増の 6,447 人となり、インターン参加者数を含めた合計数は、6,813 人となりました。また、受入自治体数は、前年度から 31 団体増加し、1,118 団体（受入可能自治体 1,461 団体の約 77%）です。

地方への新たな人の流れを創出するため、総務省では隊員数を 2026 年度までに 10,000 人とする目標を掲げています。

(3) 本書の狙い

大都市への人口集中が進む中で、地方では過疎化や担い手不足が深刻な課題となっています。

近年ではテレワークの普及や、場所に縛られない柔軟な働き方が進む中で、地域に生活拠点を持つ二拠点生活（デュアルライフ）が注目を浴び、移住のみでなく、地域との関わり方の多様化が進んでいます。

このような状況下で、南越前町では地域おこし協力隊卒業生の私、中谷と仲間たちが地域住民と地域外の人々の交点となり、地域活性化の取り組みを行なっています。

本書では、南越前町と私たちの活動拠点となっているゲストハウス「地域まるっと体感宿 玉村屋」の強みの源泉や展開されている具体的な取り組みとその成果、今後の展望を南越前町玉村屋モデルとして整理し、「知的資産経営報告書」の地域版として、ご紹介しています。

少しでも地域との関わりを深めたいと考えている人や地域活性化に取り組んでいる人たちの、これからの活動の参考になれば幸いです。

2. 南越前町の概要

(1) 地理・交通と気候風土

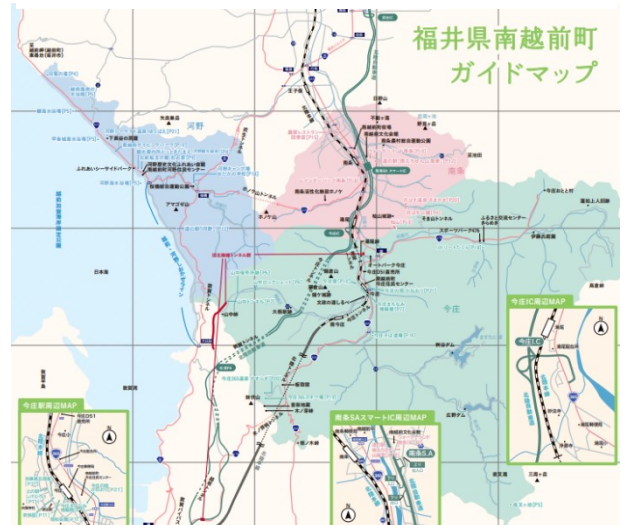
① 地理

南越前町は、2005 年に南条町、今庄町、河野村が合併してできた町です。

福井県のほぼ中央に位置し、北は福井平野につながり、東は岐阜県、南は滋賀県、西は日本海に接しています。面積は、福井県全体の 8.2%にあたる 343.69k m²を有します。

豊かな緑に包まれた山々がある今庄、海の幸に恵まれた日本海に面した河野、文化や歴史に育まれた里がある南条、「山・海・里」の 3 つの地域から構成されています。

福井県南越前町ガイドマップ



<出典>南越前町

② 交通(アクセス)

南越前町は、かつての北前船や旧北陸道沿いの宿場町、近代は蒸気機関車の峠越えのための町として栄え、古くから人が行き交う地域でした。そのため、現在も、県内の同規模の町と比較しても比較的優位な交通条件を有しています。

鉄道は、JR 北陸本線が幹線道路同様に南北に縦走し、町内には南条、湯尾、今庄、南今庄の 4 駅が設置され、福井市・越前市方面や敦賀市方面に向かう通勤通学をはじめとする日常生活に欠かせない役割を果たしています。大阪からは JR 特急サンダーバード号(約 1 時間 20 分)、名古屋からは JR 特急しらさぎ号(約 1 時間 40 分)、敦賀で北陸本線に乗り換え約 20 分程度となります。また、2024 年 3 月に北陸新幹線が金沢から敦賀まで延長され、首都圏から金沢経由でのアクセスルートがより便利になりました。

道路は、北陸自動車道や国道 8 号、国道 365 号といった北陸地方と関西・中京方面を結ぶ動脈となる道路が町の南北を縦走し、北陸自動車道今庄インターチェンジ、南条スマートインターチェンジおよび南条サービスエリアが設置されており、周辺地域への広域高速交通の利便性が確保されています。「南条サービスエリア」に隣接する形で、2021 年 10 月に道の駅「南えちぜん山海里」が、2024 年 1 月には道の駅に隣接した体験農園施設がオープンしたため、更なる観光客の増加が期待されます。

③ 気候

南越前町の気候は平野部と山間部、海岸部とで大きく異なります。

山間部は寒暖の差が激しく、県下有数の多雪地帯で、今庄地域は特別豪雪地帯に指定されています。冬が極寒な分、雪解けと共に、春を感じる地域となっています。

一方、平野部は内陸型で比較的温かく、海岸部は対馬海流の影響により温暖な気候で、積雪量はほとんどありません。

(2)「山・海・里」の3つの地域の特徴と特産物

① 南条(なんじょう) ……里

ベッドタウンとして栄えている南条は、南越前町の中で最も人口が多い地域です。福井市をはじめとする町外で働いている人も多く住んでいます。

サービスエリアに隣接した道の駅が存在し、地元の特産物を食べることができる店や観光案内所があることから、観光客にとっても南越前町の旅の拠点になっています。

市街地ではありますが、標高 492.1m の杣山がありハイキングをすることもできます。鎌倉時代に築かれた杣山城の跡が残っているため、当時の面影を感じながら登山ができます。

特産品は花はすで、作付面積は日本一です。夏には淡いピンク色の美しいはすの花を見ることができます。毎年 6 月下旬～8 月上旬に開催されるはすまつりには、多くの観光客が訪れます。

花はす畑



<提供> 玉村屋

② 今庄(いまじょう) ……山

今庄は、山々に囲まれた自然豊かな地域で、約 65%が森林です。そのため、谷沿いに集落が形成されています。江戸時代までは、旧北陸道沿いの宿場町として栄えました。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今でも宿場町として繁栄してきた面影が残っています。

宿場町として繁栄した後、北陸トンネル開通後から北陸本線電化までは鉄道の町として発展しました。今庄から敦賀までは険しい峠が複数存在し、峠には延長 1170 メートルの山中トンネルをはじめとした複数のトンネルがあり、文化庁の日本遺産に認定されています。宿場町や鉄道の町として人々が行き来した今庄の親しみやすい雰囲気は、今も受け継がれています。

特産物は柿や米で、特に柿は、今庄独自の燻し製法を活用したつるし柿が有名です。地元集落や団体等がそば店を出店し、それぞれ違ったそばの味が楽しめる今庄そばまつりなど、イベントも盛んです。

山中トンネル



<出典> 南越前町

つるし柿



<提供> 玉村屋

③ 河野(こうの) ……海

河野は、越前海岸の美しい景色を見ることができる地域です。

また、北前船の歴史やそれに関わる建物が見どころです。国道 305 号線沿いの「北前船主の館・右近家」では、当時の栄華を偲ばせる見事なたたずまいを見ることができます。右近家の別荘として建てられた西洋館は、外観は洋風、屋根は茶色のスペイン瓦が葺かれ、和と洋が入り交じった大変めずらしい造りになっており、国の登録有形文化財に登録されています。

特産品は新鮮な魚介類の他に、梅の栽培も盛んです。

甲楽城海水浴場で開催される河野夏祭りでは、日本海の海上に上がる約 5,600 発以上の鮮やかな花火が圧巻です。

右近家の別荘「西洋館」



<出典> 南越前町

(3) 地域の担い手の現状

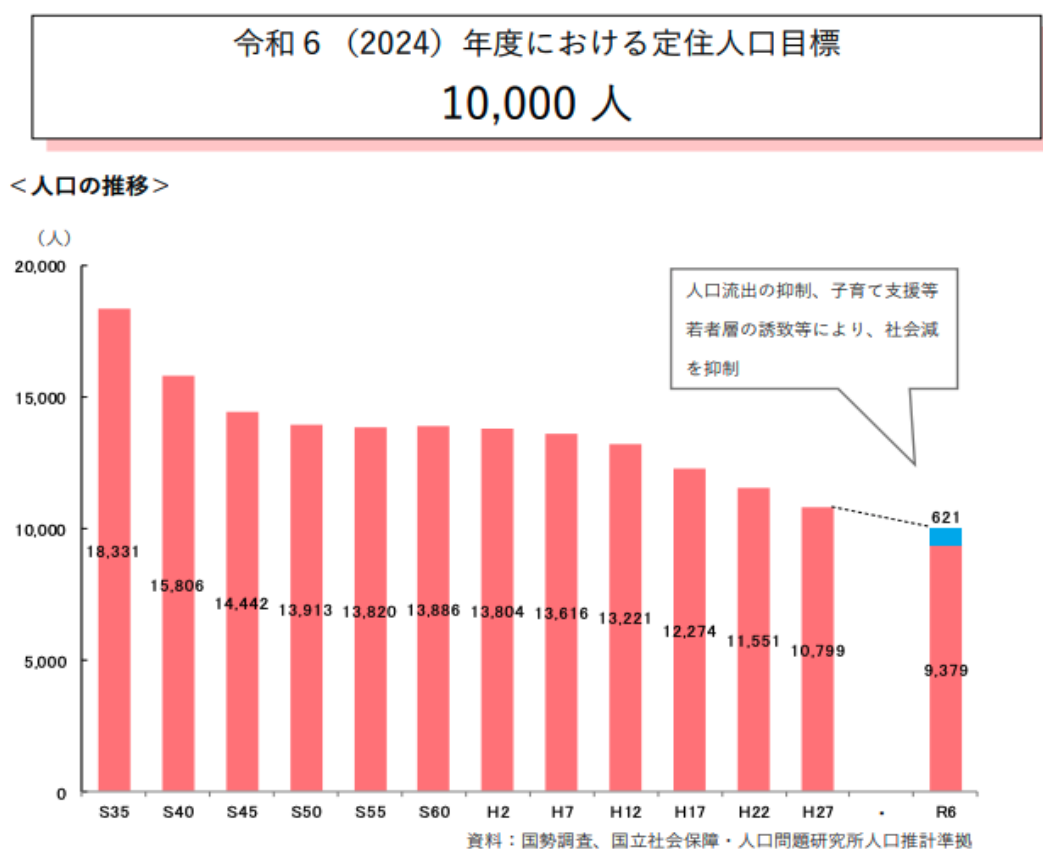
① 人口推移

前述のように、山・海・里、3つの幸を楽しめる魅力的な南越前町ですが、都市部への転出が進み、人口は大きく減少しました。昭和50年代(1975年)に入って減少幅は緩やかになったものの、若者の流出や少子化等により、自然減・社会減の傾向は続き、2023年12月には人口9,628人と1万人を下回りました。

国立社会保障・人口問題研究所による将来推計人口によると、2025年の本町の人口は、約9,200人となり、少子化・高齢化が進むとともに、高齢者を含む人口減少局面を迎えることが予測されます。

町では、今後も子育て支援や住宅政策等による定住促進を推進するとともに、若者や子育て世代の定住意欲を高め、人口流出を抑制することが必要と考えられています。併せて、移住交流にも取り組むことで社会減を最小限にとどめるなど、総合的な取り組みの推進により、2024年度における定住人口は10,000人を目標としています。(図表7)

【図表7】南越前町の人口推移



<出典>南越前町「第2次南越前町総合計画」

② 地域の課題

南越前町では、人口減少と少子高齢化の進行と共に農林水産業の担い手不足による衰退、自治会機能の維持・存続を担う若手(青年部)の減少、杣山城跡、今庄宿、中村家住宅をはじめとする地域固有の歴史・文化・景観の維持管理の担い手の確保など町が抱える課題は山積しています。特に、まちづくりに関わる人材の育成を推進するとともに、自分ごととしてまちづくりに参加できる仕組み等が必要とされています。

3. 地域活性化の取り組み(過去～現在)

(1) 行政による地域活性化へのアプローチ

南越前町の行政による計画を概観するとともに、地域活性化の担い手増加に向けた移住・定住促進等にかかる施策として、地域おこし協力隊のトピックスについて紹介します。

行政では、企業における「パーパス」や「ビジョン」に相当する「将来像」を掲げ、その実現に向け「経営戦略」に相当する「総合計画」を作り、定量目標（KGI・KPI）を置いて各種施策に取り組み、PDCA サイクルを回す等、枠組みは確立されています。しかしながら、第 1 次総合計画や第 1 期まち・ひと・しごと創生総合戦略の定量目標は未達に終わっています。

もとより長期的な視野で取り組むべき課題であるため、基本的な考え方は継続しつつ、関係人口や SDGs 等、国が取り入れた新たな視点も踏まえた、「未来づくりプログラム」が現在推進されています。

① 南越前町の総合計画等の沿革

南越前町では、2007 年度から 2024 年度まで、図表 8 のとおり総合計画等を立て、過疎化に対する各種施策に取り組んでいます。

【図表 8】南越前町の総合計画等の沿革

2007～2016 年度 第 1 次総合計画	・ 将来像：「海と緑と歴史の恵みに抱かれて、出会いから活力の花ひらく町」 ・ 目標：定住人口 1.2 万人（2005 年 1.23→2015 年推計 1.17 万人） 交流人口 100 万人（2005 年 82 万人）
2015～2020 年度 人口ビジョン(改訂版) 第 2 期まち・ひと・しごと 創生総合戦略	・ 人口が 1960 年をピークに 50 年間で 0.7 万人弱（約 37%）減少、2040 年に 0.8 万人割れを見込む。 ・ 移住・定住化促進については、前期の各施策の KPI は達成したものの、目標とした「転入者－転出者 0 人」は△55 人と未達。 ・ 中長期滞在型・反復型の関係人口の受入促進や、住まいの確保に向けた支援等を計画。
2015～2024 年度 第 2 次総合計画	・ 目標：定住人口 1 万人、交流人口 78 万人に引き下げ ・ 定住人口は、2010 年 1.16→2025 年推計 0.96 万人に対し、人口流出の抑制、子育て環境支援など若者層の誘致等で 0.03 万人増加の計画 ・ 交流人口は、2013 年 70→2024 年推計 75 万人に対し、交通ネットワークの開通効果、地域資源を活用した交流等で 3 万人増加の計画
2020～2024 年度 第 2 次総合計画 後期基本計画	・ 目標：定住人口 1 万人、交流人口 78 万人は不変 ・ 定住人口は、2015 年 1.08→2024 年推計 0.94 万人と減少幅拡大の中、人口流出抑制、子育て環境支援等の若者層誘致等で 0.06 万人増加の計画 ・ 交流人口は、2018 年 57 万人に減少の中、交通ネットワークの開通効果、地域資源を活用した交流に加え、訪日外国人旅行者の誘致等を推進の計画 ・ 6 つの基本目標に沿って 21 の基本施策を掲げつつ、特に戦略的に取り組むものについて、「未来づくりプログラム」として分野横断的に連携するとともに、SDGs を課題解決の切り口に活用し、計画全体の達成をリード

<出典>南越前町の総合計画等を基に、筆者作成

② 移住・定住化促進施策の個別トピックス～地域おこし協力隊

南越前町では、2013 年度から地域おこし協力隊に取り組んでおり、これまで、任期途中もしくは任期満了後に町を離れた隊員も含めてメンバーは 10 人を数えます。

最初は 2 名採用でスタート。それぞれが地域の生活や行事に参加、交流することで、地域住民が当たり前過ぎて見過ごしている魅力に気づき、かわら版や SNS で町内外に情報発信したり、また忘れていたかつての賑わいを取り戻すなどのイベントを実施したり、町外で地域の食資源の PR をしたり、逆に町外の取り組みを視察したりと、さまざまなことに取り組んできました。

その中で、3 年目には「流動創生事業」という、南越前町への移住に拘らず、広く日本全国の地方を巡る体験ツアーを主催し、まずは都心の人々に地方への関心を高め、関係を持ってもらう取り組みの事業化を実現しました。これと南越前町に滞在してさまざまな生業を体験してもらう企画とあわせて、役場も補助金制度を設けてこの取り組みを支援しました。国が打ち出した「関係人口」や「複数拠点居住」という考え方の先駆けともいえるこうした取り組みを南越前町でできた背景には、古くから交通の要所として栄え、「道の町」「旅の町」として人々の往来を見守ってきた歴史や文化と関係があるかもしれません。

なお、この事業の参加を経て地域おこし協力隊になった宇野さんは、任期満了後の現在も南越前町に残り、ワーケーション体験ができる滞在型事業を手掛けています。

他には、台湾出身で、台湾からのインバウンド促進や外国人との交流に取り組んだ方などがいました。

現役の田上さんは、地域住民をまち歩き案内役にして、内外から来た人々とまちを練り歩き、地域の魅力を発掘する取り組みを手掛けています。

こうした南越前町の地域おこし協力隊の活動を支える役場の取り組みの良い点としては、以下の 4 点が挙げられます。

- 毎年なるべく募集・採用を行い、同時期に複数の協力隊メンバーが並存するようにすることで、メンバー同士のつながりを持ちやすいように配慮していること
- 協力隊メンバーの任期終了後の南越前町への定着化を見据えて、任期中から本人が希望する任期後の生業の準備活動を役場が支援していること
- 協力隊メンバーが発案したアイデア（流動創生事業など）を、役場が前例に囚われずに実現に協力していること
- 役場が、移住者を現役協力隊メンバーや卒業生に紹介するなど、人脈づくりのきっかけを作っていること

(2) 民間による地域活性化へのアプローチ

① ゲストハウス「地域まるっと体感宿 玉村屋」

2016 年から南越前町の地域おこし協力隊となった私、中谷は、任期終了後の活動も見据えて、着任時に 3 か年活動計画でゲストハウスの開業等を企画提案しました。役場もこの取り組みを協力隊の活動として認め、今庄で空き家となっていた古民家を紹介したり、協力隊の活動として広報したりして、積極的に応援してくれました。

まずはここを拠点にイベントを開催しながら、改修工事等を進め、2019 年に「地域まるっと体感宿 玉村屋」を開業。宿のコンセプトは、「第 2 の実家」「泊まれる寺子屋」です。

この宿の狙いは、移住を検討していたり、移住までは考えていないものの、地方での暮らしに関心を寄せていたりする若者が、地域に暮らす住民と出会い、「ごはん会」や「体験ツアー」を通じて住民の日常生活（仕事や趣味）を体験し交流する場を作ることにあります。

これにより、ゲストは地域の暮らしを肌感覚を持って知ることができ（「泊まれる寺子屋」）、また、リピーターになり何回か訪れれば、地域に知り合いも増え、「第 2 の実家」のように居心地の良い居場所となり、移住や地域の関わりに前向きになれます。他方、地域住民にとっても、ゲストと触れ合い、自分の暮らしに対する外からの視点を知ることにより、今まで気づかなかった自分達の日常の良さに気づくことができます。

このような活動をする中、地域の診療所の家庭医と意気投合し、医学生や研修医がここを拠点に地域住民と普段着で交流し、「暮らしを診る」地域医療のヒントを探るプロジェクトも実施しました。

人が幸せを感じるのは、人とのつながりを得てほっとできるような関係性、自分らしく主体性をひらいていく自律性、小さくても自分のできたことを実感できる有能感の 3 つが重要といわれています。

玉村屋は、この「つながる、ひらく、できる」を応援する「ほっとできる居場所と自己表現ができる舞台」を目指しており、ゲストと地域住民双方に有意義な取り組みは、徐々に共感の輪を広げています。

【ごはん会】

- ここは、玄関の扉を開ければ「おかえりなさい」が聞こえてくる「第二の実家」。普段、頑張るあなたが、肩肘はらずにゴロゴロできる場所。
- その日に泊まったゲストや宿スタッフ、地域住民との「ごはん会」は、みんなで作った手作りのごはんが食卓を彩ります。食材は、できるだけ地元産のお野菜などを使っています。



【体験ツアー】

- “地域の日常におじゃまする”、「泊まれる寺子屋」。
- 体験施設の中での体験プログラムではなく、当宿では地域住民のリアルな日常生活へと誘います。季節折々の農作業を始め、ここにしかない、ここでしかできない経験をすることができます。

<ツアー例>

切り花/ドライフラワーづくり、獣害対策ツアー、ハスの花摘み、今庄つるし柿づくり、日本酒仕込み、野菜収穫、梅の収穫、飲食店起業



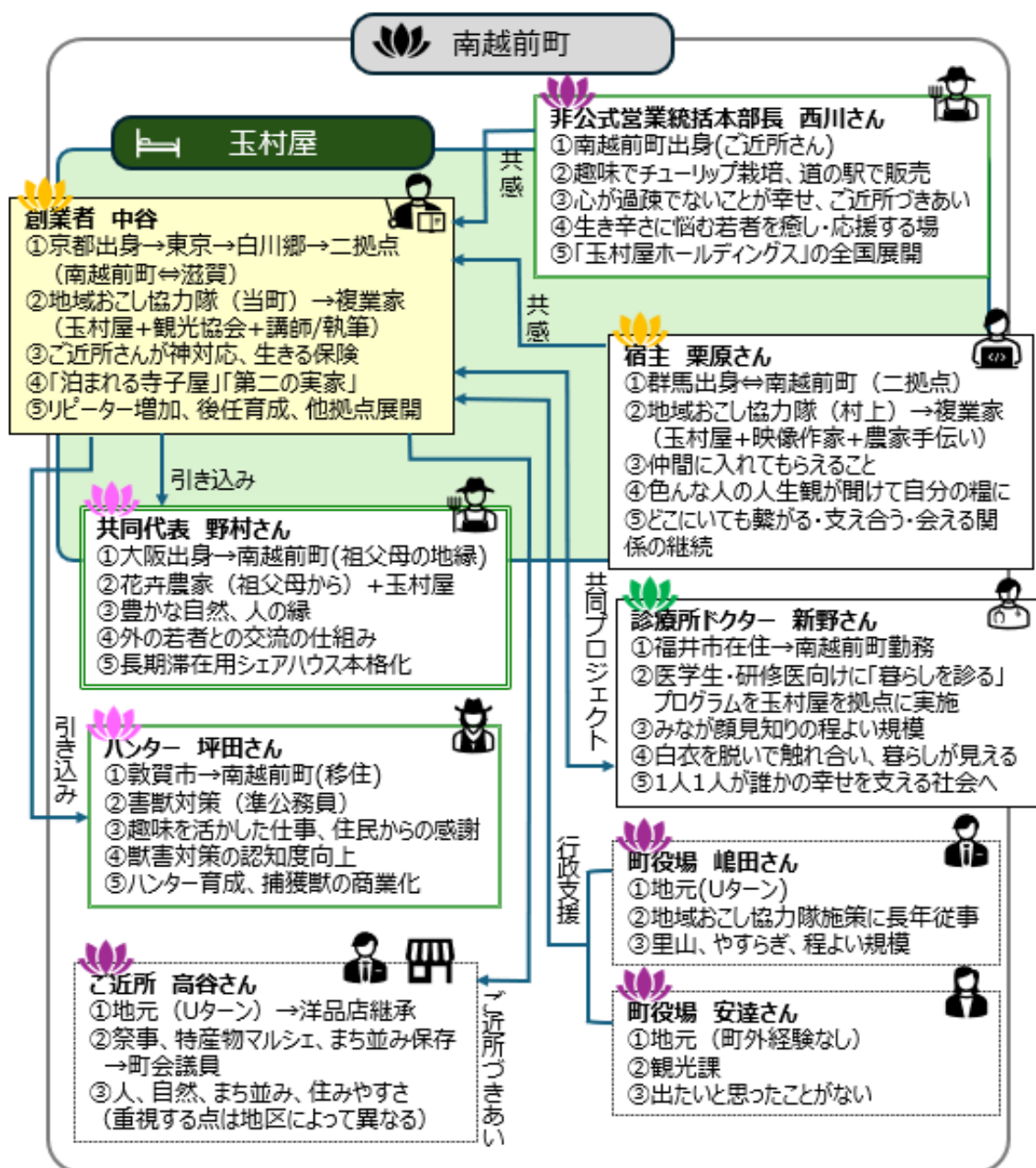
② 南越前町と玉村屋の魅力

玉村屋メンバーとその活動に関わる人々(①属性等)に、②地域での取り組み、③南越前町の魅力、④玉村屋の魅力、⑤今後の取り組みや想いを語って頂き、玉村屋との関係性を表した相関図(図表 9)にまとめました。

共通した想いは、南越前町の暮らし(自然・食べ物・人)が好きで、心の豊かさを大切にしていることです。

なお、地域住民、移住者、二拠点生活者、関係人口と南越前町との関係性の違いを、はすの花の色で識別できるようにしています。詳しくは、図表 9 下部の凡例を参照下さい。

【図表 9】南越前町と玉村屋の魅力



<出典>ヒアリング内容をもとに、筆者作成

(3) 取り組みのまとめ

地域の人々は、気さくで温かく寛容、高いおもてなしの心でコミュニケーションに長けているため、人口1万人という大き過ぎない町では、みんな知り合いという感覚で、おすそ分けをしあい、何かあっても生きていけるという安心感、そして何より町の自然、食べ物、人が好きという感覚を持っています。

その背景には、町の多様な自然や交通の要所となった立地や歴史があり、そこで育まれた風土とそれを残そうとする地域の人々の暮らしがあります。

また、住民に近く、顔の見える行政は、地域おこし協力隊をはじめ、外部からも多様な人材を受入れ支援しながら、地域の人々と外部をつなぐ取り組みを行ってきました。

私たちも、そうした地域活性化の担い手となり、様々な課題を乗り越えながら、空き家を活用した玉村屋開業、ごはん会や体験ツアーのメニューの充実と新しいチャレンジに挑んできました。

そんな活動に魅せられて、自分探しの若者や移住希望の方々が玉村屋を訪れ、地域の人々の生活に触れる機会が少しずつ増加しています。また、他の地域おこし協力隊卒業生や診療所医師など、地域の活性化の輪も複数の担い手が核となり、互いに連携しつつ広がりを見せています。

そこには、「過疎」という言葉から想像する陰鬱な雰囲気は微塵も感じられず、むしろ、それぞれ平穏で温かく、日々幸せ（ウェル・ビーイング）を実感している姿があると考えています。

他方、こうした取り組みを通じて、新たな課題も見えてきました。

例えば、町の多くの面積を占める山林についてみると、かつては林業が盛んに営まれていましたが、生業として成立しにくくなってきたため、倒木が放置される等、だんだんと管理が手薄となっているのが現状です。その結果、土砂崩れの危険性が高まったり、動物と人間の生活の境目が曖昧になり獣害の要因の一つとなっています。また、そのような地形のため、農業を営むうえでも農地が飛び地になり、生産効率がなかなか上がらないといった課題も見えてきています。

こうした課題について、新しい考え方ややり方で解決を図るような「外の目」を活かした取り組みも一層求められると考えています。



<提供> 玉村屋

4. 「地域」と「担い手の交点」の強み(知的資産)

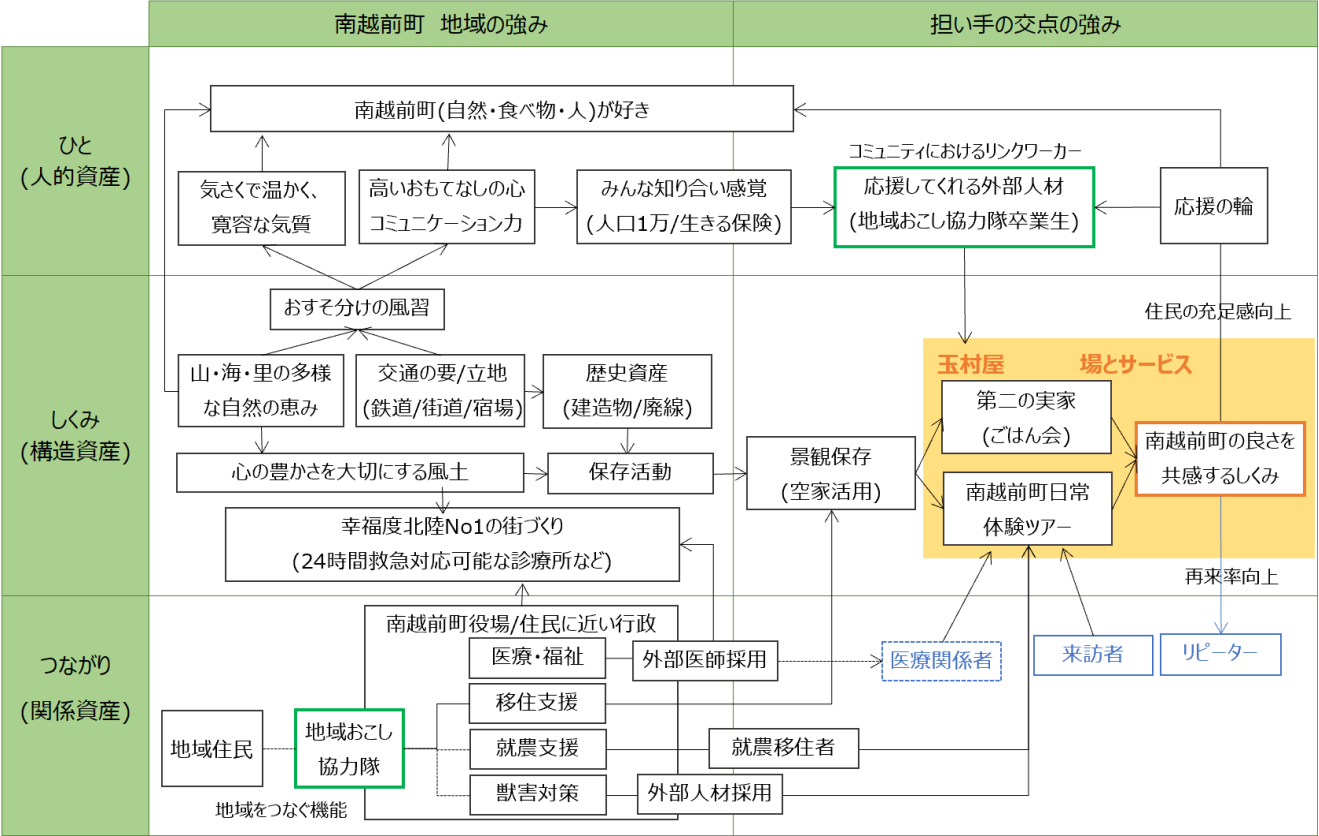
これまでの地域活性化の活動内容を踏まえ、南越前町(地域)と地域活性化に関わる私たち外部人材(交点)の強みを知的資産の観点から図表 10 に整理しました。

山・海・里の多様な自然の恵み、昔からの交通の要所として発達した町では、今でも「心の豊かさを大切にする風土」や「おすそ分けの風習」が根付いています。そんな風習・風土に育まれた地域の人々は、気さくで温かく、寛容な気質、そして、高いおもてなしの心とコミュニケーション力の持ち主です。

「地域に暮らすみんなが知り合い」という感覚は住民間の距離に留まらず、「行政がご近所さん」といわれるほど行政と住民の距離も近く、行政事業である「地域おこし協力隊」やその卒業生も、地域のつながりを支えています。

外部人材であった私が、地域おこし協力隊の活動から空き家を再生し、ゲストハウスを開業し、玉村屋を起点に南越前町の良さを共感するしくみを作り上げました。このしくみにより、住民自身の誇りと南越前町への愛着を更に高め、応援の輪による好循環を生み出しています。

【図表 10】南越前町と担い手の交点の知的資産



<出典>ヒアリング内容をもとに、筆者作成

人的資産	住民等が転出時に持ち出すことができる知的資産。個人に備わっているものであり、その人にしかない技術や知識を指す。なお、地域の場合は、住民等に共通して備わっている技術や知識も含む。
構造資産	住民が転出しても地域内に残留する知的資産。自然、立地、まち並み、施設等の観光スポット、地域ブランド、地域全体で続いている取り組みや慣習などを指す。
関係資産	地域の対外的な関係に起因する知的資産。地域に根差した組織の提携先に限らず、そこで働く人やさらにその関係者も指す。

5. 地域活性化の今後の展開(現在～未来)

(1) 南越前町(行政)の目指す方向性

南越前町では、まちづくりの基本理念を掲げ、6つの基本目標を柱に21の基本施策、57の細施策を後期基本計画に定めています。

① まちづくりの基本理念 (将来像)

海と緑と歴史の恵みに抱かれて、出会いから活力の花ひらく町

② 3つの未来づくりプログラム

特に戦略的に取り組むものを「未来づくりプログラム」と位置づけ、分野横断的な連携体制で推進しています。

- I. 地域をささえる ～暮らしを支える基盤が維持され、安定した暮らしを実感できる地域に
- II. 地域のつながり ～多様な人と人とのつながりがあり、住み続けたい地域に
- III. 地域のにぎわい ～地域の多彩な資源が活かされ、魅力あふれる地域に

【図表 11】基本目標との関係



<出典>南越前町ホームページ

(2) 「担い手の交点」である私たちが目指す方向性

① 未来への想い

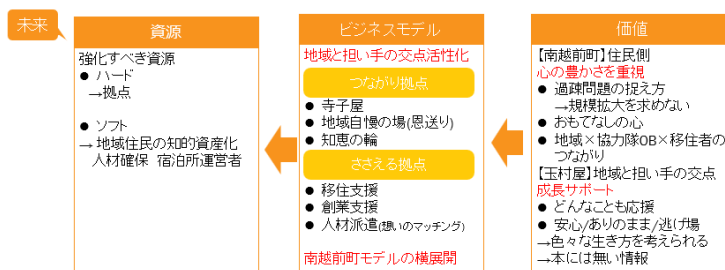
未来ディスカッションを通じて見えてきた私たち玉村屋メンバーの想いは、以下のとおりです。

- I. 「安心(落ち着く逃げ場)」、「応援」、「成長」の価値提供を通じて、心の過疎化を防ぎたい。
- II. 創業者中谷翔が不在でも玉村屋の宿泊/体験事業を回せるようにしたい。
- III. 応援の輪の強化を通じて、つながり拠点・ささえる拠点へ進化し、南越前町の担い手不足を解決し続けたい。
- IV. 南越前町玉村屋モデルを他の地域に横展開し、同様に担い手不足で困っている地域でも、心の過疎化を防ぐ仲間をつくりたい。

【図表 12】未来ディスカッションの投影資料

3. 南越前町で暮らす“ええ未来”を想像しよう

世代間ギャップ。道の駅の新設/新幹線開通 → 人流の変化。自然環境の変化/動物の生態



<出典>筆者作成

未来ディスカッションの様子



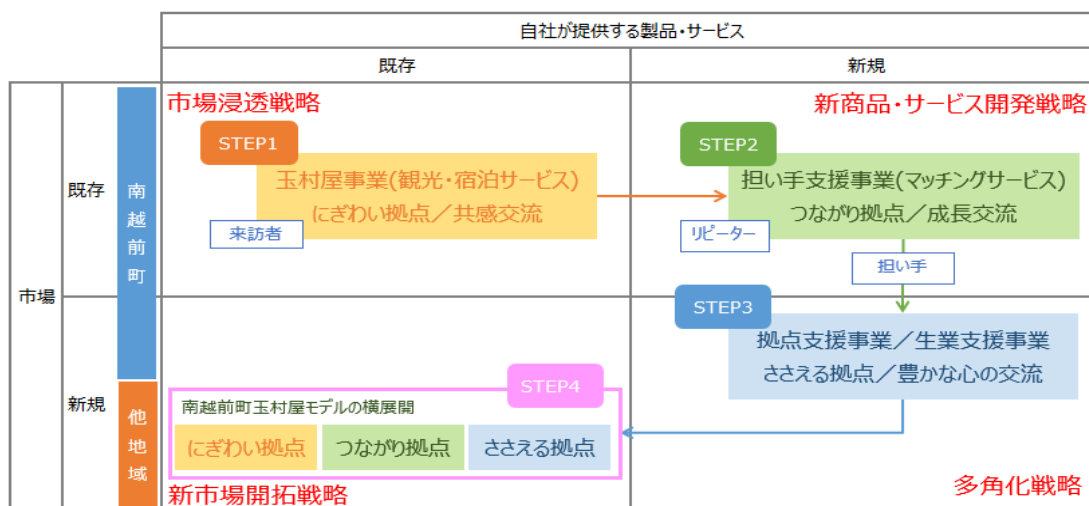
<出典>筆者撮影

② 成長ストーリー

私たちの「4 つの想い」を実現する成長ストーリーをアンゾフの成長マトリクスに当てはめ、「南越前町玉村屋モデル」として図表 13 に整理しました。

4 つの想いのⅠとⅡは既存の強みを更に強化する施策で、「市場浸透戦略」に、Ⅲは新たな2つの取り組みで、「新商品・サービス開発戦略」と「多角化戦略」に該当します。Ⅳは、南越前町で自ら培ってきたノウハウを他地域市場に拡大していく「新市場開拓戦略」となります。

【図表 13】南越前町玉村屋の成長ストーリー



<出典>筆者作成

③ 価値創造モデル

これらの成長ストーリーの価値創造モデルは、①交点であるにぎわい拠点（玉村屋/ゲストハウス）を起点に来訪者と地域住民の共感交流でつながりを創り、②共感する担い手たちと地域住民をつなぎ、共に地域社会の課題解決に向けた活動を推進する中で、成長実感を高められるつながり拠点到進化させていきます。

他方で、③これら活動の支えるため、移住希望者への生業創出支援やシェアハウス等の滞在拠点を整備します。このように担い手不足を解消し、相互応援の輪を広げていくことで、南越前町地域がささえあう拠点、豊かな心の交流の場であり続ける好循環を生み出す仕組みです。そして、④成功モデルとして他地域にも横展開することで、更に、心の豊かさの好循環の連鎖を引き起こす可能性を秘めているモデルです。

④ 成長へのステップ

玉村屋で好循環を実現していくための4つのステップです。

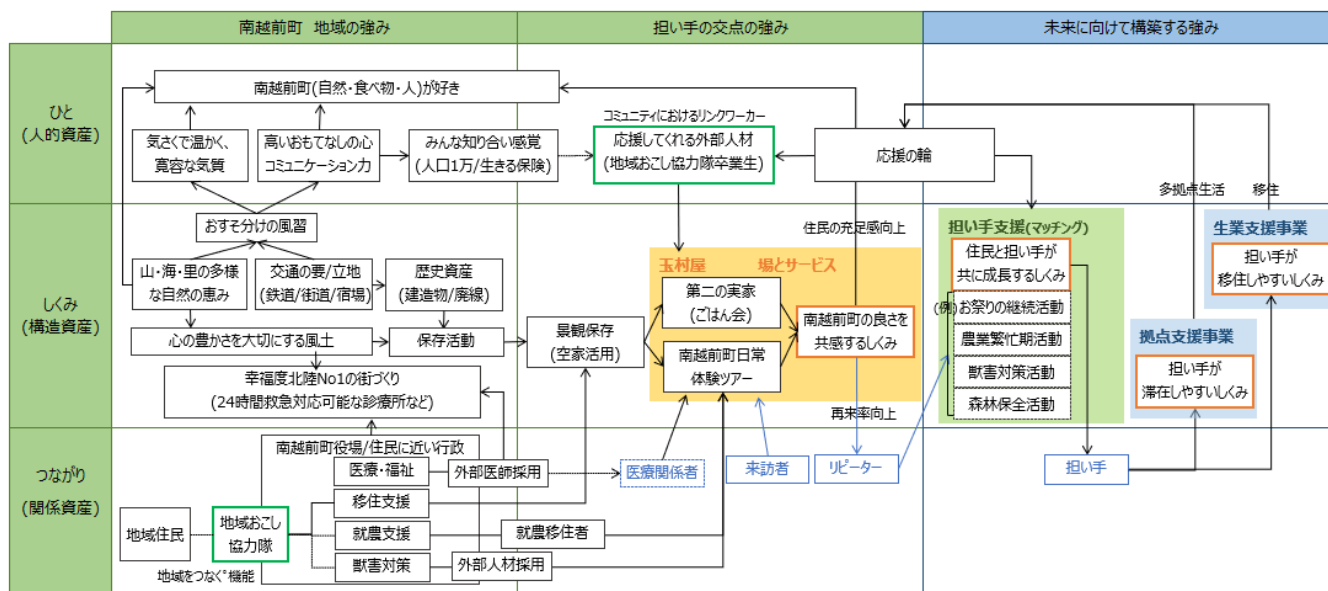
- Step1：にぎわい拠点（共感交流）の強化 観光・宿泊サービスの強化・拡大
- Step2：つながり拠点（成長交流）への進化 担い手マッチング事業の創出・仕組づくり
- Step3：ささえる拠点の構築 生業支援と拠点支援の創出・仕組みづくり
- Step4：他地域へ「南越前町玉村屋モデル」の横展開

短期的には、Step1 で、玉村屋の提供価値の浸透と来訪者のリピート率を向上すると共に、事業運営の定着を目指します。中期的にはStep2の担い手支援事業とStep3の拠点支援事業／生業支援事業のしくみづくり、そして、3つのしくみが相乗効果を生む南越前玉村屋モデルとしての実績やノウハウを蓄積することで、Step4の他地域展開の仲間づくりを通じて、長期的に持続可能な事業展開を目指します。

(3) 強み(知的資産)の強化

私たち玉村屋の成長ストーリーの先に見えてくる未来の実現に向けて、強化・構築する強みを知的資産の観点から図表 14 に整理し、これからの事業展開で強化すべき知的資産と必要なアクションを図表 15 にまとめました。

【図表 14】南越前町と担い手の交点の知的資産(未来)



<出典>筆者作成

ポイントとなるのは、「応援してくれる外部人材」の人的資産から派生した取り組みを、玉村屋(ゲストハウス事業)を介して「南越前町の良さを共感するしきみ」へと構造化し、その機能を更に強化していきます。そして、担い手支援(マッチング事業)「住民と担い手が共に成長するしきみ」に発展させると共に、その受け皿となる「担い手が滞在しやすいしきみ」(拠点支援事業)や「移住しやすいしきみ」(生業支援事業)も並行して構築する点です。

【図表 15】これからの事業展開に必要な知的資産とアクション

これからの事業展開	強化すべき知的資産	必要なアクション
にぎわい拠点の強化 (Step1 共感交流)	・[人的] 応援してくれる外部人材 ・[構造] 提供価値(共感交流) ・[関係] 来訪者との関係性	・スタッフの採用と育成 ・認知度向上とブランド力強化 ・リピート率の向上施策の実施
つながり拠点への進化 (Step2 成長交流)	・[人的] 地域住民の得意→応援の輪 ・[構造] 住民と担い手の共成長のしきみ化 ・[関係] リピーターとの関係性	・担い手活動のプランニング ・マッチングプラットフォームの活用 ・担い手主役のプロジェクト始動
ささえる拠点の構築 (Step3 豊かな心交流)	・[人的] コンサル能力の蓄積 ・[構造] 生業支援と拠点支援のしきみ化 ・[関係] 担い手と住民の関係性の構築力	・セミナー資料などコンテンツ作成 ・コンタクトポイントと拠点の構築 ・コミュニティ活動の定期開催
南越前町玉村屋 (Step4 モデルの横展開)	・[人的] モデルの伝道師の育成 ・[構造] モデルの視覚化 ・[関係] 他地域との関係性の創出力	・伝達力のスキルアップ ・伝達用コンテンツの作成 ・相互視察の実施

<出典>筆者作成

(4) 今後の主な活動計画

今後、私たちの知的資産をさらに強化し、応援の輪を広げていくための主な活動をご紹介します。

① 玉村屋「住込み宿主さん制度」の本格スタート

玉村屋では、多様な人が集まることで、それぞれの得意なことを元に化学反応が起こり、ワクワクする新しい取り組みがいくつか始まっています。そのため、我々スタッフがいつもの顔ぶれでお迎えするだけでなく、期間限定で異なる人材が宿主を務め、その人が得意なことを生かして玉村屋を運営していくことで、新しい化学反応が起きると考えています。

今までにも、玉村屋の活動に共感頂いた4名の方が住込み宿主さんを経験し、好評を得ています。手探りで進めてきた期間限定の「住込み宿主さん制度」ですが、今後は、バラエティに富んだ宿主さんを定期的に迎えていきたいと思えます。住込み宿主さんがメインで玉村屋の運営をしますが、我々いつものスタッフがサポートをすることで、安定的かつ新しいことが起こる運営体制にしています。

これは、玉村屋が属人的運営から継続的に運営できるようにするための足掛かりだけでなく、宿主の経験をとおして、自身の生き方や得意をアップデート頂くことも大切にしたいと考えています。その他、玉村屋が培ったゲストハウスの運営ノウハウを広く知っ

て、習得して頂きたいとの想いもあります。地域でのゲストハウス運営に興味があるけど、いきなり自分でゲストハウスを立ち上げるのは不安だと思っている方々に向け、お試し練習の場として、お役に立てたらと考えています。

まずは、2024年2名程度、住込み宿主さん稼働率20%、2025年～2027年毎年3、4名程度、住込み宿主さん稼働率50%と活躍頂く期間を増やし、2028年以降は住込み宿主さんがメインで玉村屋を回している状態にもっていければ、「属人的運営」から「多属人的運営」に移行していきたいです。

② 玉村屋をもっと身近に「オンラインミートアップ」の定期開催

玉村屋に訪れて頂いたゲストは、延べ700人を越え、リピートするゲストが増えているのも特徴です。しかし、また南越前町に訪れたい、玉村屋のメンバーと冗談を言って大笑いをしたいと思っても、忙しい日々を送っていると再来の機会を作ることは難しいことと思います。第二の実家に足が遠のいている人々とも、オンラインでつながることができる「オンラインミートアップ」を定期的に行い、共感の心灯を消さない活動も積極的に行いたいと考えています。

概ね四半期に1回程度、南越前町の四季のうつろいと共に玉村屋や地域の日常ニュースなどを共有するイベントとして、定着させていきたいと思えます。そして、参加者の数やリピート率が回数を重ねる毎に伸びていくことを目指します。

玉村屋前での記念撮影



<提供>玉村屋

③ 南越前町との「関わりしろ」を増やそう

あなたの関心のあるテーマのプロジェクトを玉村屋スタッフと一緒に起こしてみませんか？

例えば、医師の新野さん×玉村屋の中谷でタックを組み、地域住民と研修生が地域医療の現状や今後の課題について直接話をする機会を設け、最終的には共著で「家庭医とゲストハウスオーナーが診るウェルビーイングな暮らし〜里山で生きる 10 人〜」を執筆しました。

また、直近では、ハンターの坪田さんとハンター育成合宿を立ち上げることも考えています。体験に留まらず、自らの得意や興味の芽を南越前町の住民の皆さんと実現しましょう。

地元根付いたお祭りの担い手活動や昭和レトロを子供たちに伝える活動、森林保全活動でチェーンソーをマスターするなど、企画は地域課題を解決することにつながることであればなんでも OK です。

玉村屋はコーディネーターとして、仲間集めに必要な告知やオンライン座談会、現地活動のサポートなど運営を担います。

今庄地区のお祭り風景



<提供>玉村屋

④ 地域活性化で頑張っている仲間との交流促進

地域まるっと体感宿 玉村屋では、私たちの活動に興味を抱いて頂いた方からのお問合せをお待ちしています。話を聞いてみたいという方が集まれば、座談会やセミナーの開催なども企画します。現地だけではなく、オンラインや出張も可能です。今までに開催したセミナーをきっかけに、現地視察にいらっしゃった方もありますので、現地に訪れて、話を聞きたいという希望も大歓迎です。

玉村屋は、「ここには、なにもない」と地域住民が口を揃えているような地域で「日常」をコンテンツにすることで、人を呼んでくることができるという仮説のもと、移住者である私、中谷が開業しました。その取り組みは、福井県内で新聞やテレビに取り上げられるほど、注目いただいております。

地域と関わりながら「なにかをしたい」あなたや地域資源を活かしたゲストハウス事業に興味があるあなたに視察・研修先として、最適なプランをご用意したいと考えています。

また、他方、玉村屋スタッフの知見を広げ、更なる成長を目指して、地域活性化活動の視察受け入れしてくれる方も募集しています。年 1 回の研修旅行として定期開催し、現地での意見交換に刺激を受けて、玉村屋のさらなるにぎわいや Step2 や Step3 の新規事業のヒントを得て行きたいと考えています。

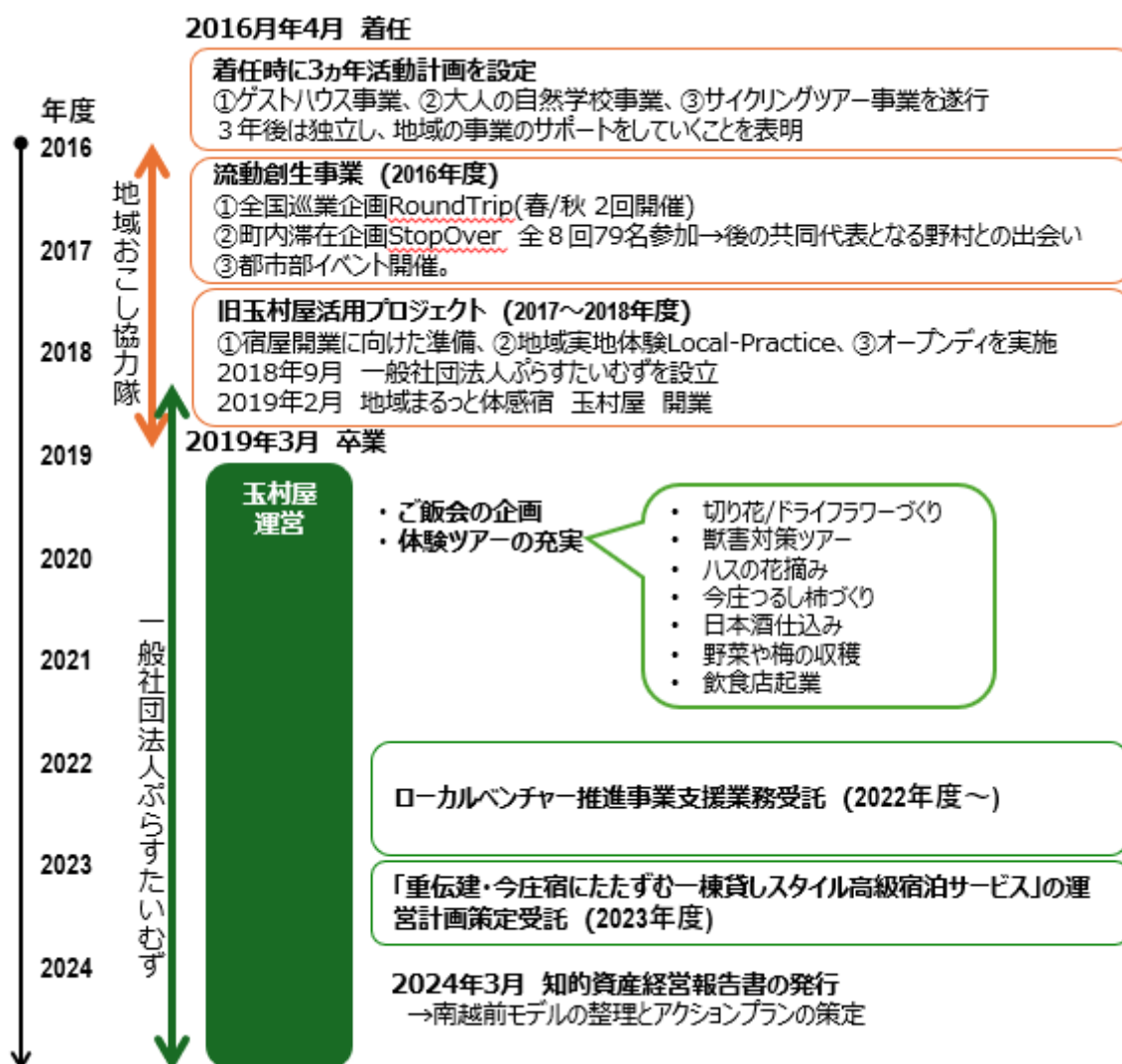
そして、地域の過疎の問題を「人口」という数だけで捉えずに、「心の豊かさ」につながる地域での生活の質に着眼した取り組みを行い、「心の過疎化」を防ぐ仲間の輪を広げていきたいと考えています。

6. 参考資料

① 地域活性化の活動拠点

名称	地域まるっと体感宿 玉村屋
ホームページ	https://tamamuraya.jp/
運営会社	一般社団法人ぶらすたいむず 「地域に向けて足し算の支援と掛け算の支援」を行うのが社名の由来。
創業者	ショー／中谷 翔（なかにしょう）
共同代表	ノッチ／野村 直樹（のむら なおき）
スタッフ	なるちゃん／栗原 成美（くりばら なるみ）
ヒアリング協力者	西川修司さん、坪田愛子さん、新野保路さん、高谷直樹さん 南越前町観光まちづくり課 参事 嶋田高士さん、主事 安達由理さん

② 玉村屋創業者（中谷翔）の地域活性化活動の軌跡



7. あとがき

● 注意事項

この知的資産経営報告書に記載しました将来の目指す方向性および活動計画などは、全て現在入手可能な情報をもとに、活動主体の判断にて掲載しています。

そのため、将来において地域を取り巻く環境（内部環境および外部環境）の変化によっては、これらの記載事項を変更すべき必要性が生じることもあり、その際には本書の内容が将来実施または実現する内容と異なる可能性もあります。

よって、本報告書に記載した内容や数値などを、活動主体が将来にわたって保証するものではないことを十分にご了承ください。

● 問合せ先

屋号 地域まるっと体感宿 玉村屋

担当者 複業家 中谷翔

住所 〒919-0131 福井県南条郡南越前町今庄 82-10

電子メール imajo.guesthouse@gmail.com

● 本報告書の内容の合理性について

本報告書に掲載された内容は、南越前町地域で活動する人々の過去から現在に至る活動環境（内部環境および外部環境）に照らし、合理的な内容であることを認めます。

2024 年 3 月

経済産業大臣登録 中小企業診断士

役田泰江(421631)、長山萌音(424768)、石田充弘(213517)、

宮崎博孝(213170)、木内清人(410492)、井上有弘(403508)



